

住民を交えて「長洲・荒尾地域の再生方策のあり方」について活発な意見交換が行なわれました。「行政や大学等の取り組みだけでなく、地域住民や民間団体の取り組みの重要さが分かった」、「有明海沿岸市町村が再生のために協働で取り組むネットワーク化が必要」などの意見が出され、住民参加の第1歩が踏み出されました。来年2月には八代海でも計画されており、住民主体となり行政や大学等との連携体制が築かれて、有明海・八代海の再生へ繋がるものと期待されます。今後とも皆様のご理解と協働をよろしくお願いいたします。



(有明海・八代海の生物—6)

ハママツナ

河口や地下水が湧出する海岸は、潮の干満に伴って塩分が大きく変化する厳しい環境です。このような場所には、塩生植物と呼ばれる特殊な植物しか生育することができません。ヨシ・フクド・シオクグ・ハマサジ・ナガミノオニシバなどが、熊本県の海岸の代表的な塩生植物です。

ハママツナ(浜松菜)*Suaeda maritime*(アカザ科)は、高さ10~30cmのハウレンソウに近縁の一年草で、潮間帯下部のやや砂っぽい泥質の塩性湿地に群生します。長崎県・佐賀県の海岸に繁茂する同属のシチメンソウ(七面草)と同様に、秋に紅葉し、湿地は深紅のじゅうたんを敷きつめたようになります。有明海の緑川・白川河口や八代海北岸に点在しますが、十分な調査は行われておらず、熊本県レッドリストでは「情報不足」に分類されています。逸見教授は、塩性湿地の保全・再生のために、国内における本種の遺伝的類縁関係を調査し、移植による群落再生の可能性を探っています。



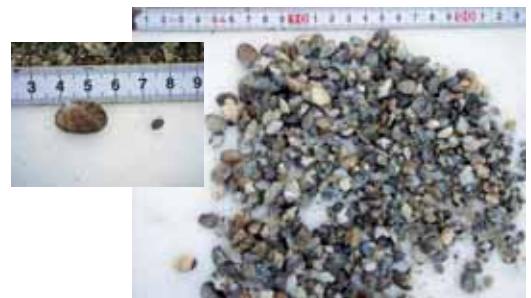
ハママツナの群落

“有明海再生の現地実証試験” 経過の続報！

文部科学省の科学技術振興調整費重要課題解決型研究「有明海再生」(熊本大学代表 滝川教授:平成17年度~)から、熊本新港北側の“北なぎさ線”(18年度造成)と、“エコテラス護岸”(19年度造成)の紹介です。平成19年10月27日に、2ヶ所の実験地、国土交通省海洋環境センター、玉名横島海岸の試験地の見学会(80名が参加)を行いました。

(1)北なぎさ線でアサリの稚貝が大量発生

写真は、石ではなく全てアサリです。縦横25cm、深さ5cmの底泥を採取して、1.0mm目の篩で分けると、稚貝が最大850個体(1.0㎡当りに換算すると約16,000個体)残りました。なぎさ線を作ることで、沢山の生物が生息できることが、改めて分かりました。



(2)エコテラス護岸完成

今年9月に、熊本市沖新町地先(熊本港大橋南側)のコンクリート護岸の前面に、狭い場所に生物の生息場を提供する目的でテラス式の浅場を造りました。

上段のテラス干潟は塩生植物の生息に適した高さに設定し、中段は稚魚などが逃げ込めるように潮溜りにし、下段は粒度組成の異なる土砂を入れました。今後、それぞれ生態系の創生過程をモニタリングします。

